

Immediate Press Release 2011.12.26

## 難波田史男の15年 NAMBATA Fumio: Works 1960-1974

謹啓 師走の候、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。平素は、東京オペラシティ アートギャラリーの展覧会活動に対して、格別なご高配、ご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。さて、当館では2012年1月14日(土)より展覧会「難波田史男の15年」を開催致します。

難波田史男(1941-74)は、繊細な線と色彩による優れた作品の数々とその鮮烈な生涯によって、戦後美術の歴史に名を刻んでいます。日本の抽象絵画の開拓者である難波田龍起の次男として生まれた彼は、非凡な才能を見せつつも既成の美術教育にはなじまず、文学や音楽を糧としながら独自の表現を求めました。自己の内面を見つめ、また時代や社会の現実とも真摯に向き合うなかから生まれた作品は、繊細でありながら透徹した史男の感性を瑞々しく伝えていきます。わずか15年ほどの短い活動期間ながら、生み出された作品は夥しい数にのぼります。「青春の画家」というイメージとはうらはらに、難波田史男の芸術はすでに十分な発展と展開を遂げ、きわめて多様かつ凝縮した表現世界を確立しています。

本展では、東京オペラシティ アートギャラリーの寺田コレクションに取められた膨大な史男作品から100点あまりを精選し、さらに各地の美術館、所蔵家より多くの秀作、代表作を集め、また日記、スケッチブック、写真など史男ゆかりの資料もあわせて展示します。難波田史男の制作を導いたさまざまなテーマや関心、また画家の生涯に沿いながら、作品約240点および資料により難波田史男の魅力を複眼的に紹介します。

つきましては、「難波田史男の15年」を貴媒体でご紹介いただきたく、周知・告知活動にご協力賜りますようお願い申し上げます。

謹白

### 〔開催概要〕

展覧会名: 難波田史男の15年 NAMBATA Fumio: Works 1960 - 1974  
 会期: 2012年1月14日[土]-3月25日[日]  
 会場: 東京オペラシティ アートギャラリー  
 開館時間: 11:00-19:00(金・土は20:00まで/最終入場は閉館の30分前まで)  
 休館日: 月曜日、2月12日[日・全館休館日]  
 入場料: 一般1,000(800)円/大・高生800(600)円/中・小生600(400)円

\* 諸事情により開館時間の変更および休館の可能性がございます。最新情報はウェブサイトにてお知らせいたします

\* 同時開催「収蔵品展040『私』を知るための問い」、「project N 48 佐藤翠」の入場料を含みます。

\* 収蔵品展入場券200円(各種割引無し)もあり。

( )内は15名以上の団体料金。その他、閉館の1時間前より半額、65歳以上半額。土・日・祝日の中・小生無料。

\* 障害者手帳をお持ちの方および付添1名は無料。割引の併用および入場料の払い戻しはできません。

\* 一部作品に展示替えがございます。前期:1月14日[土]-2月19日[日]後期:2月21日[火]-3月25日(日)

お問合せ: 03-5353-0756 ウェブサイト URL:<http://www.operacity.jp/ag/>

主催: 公益財団法人 東京オペラシティ文化財団  
 協賛: 日本生命保険相互会社  
 協力: 世田谷美術館/東京国立近代美術館/新潟県立近代美術館

### ■本リリースに関するお問い合わせ

東京オペラシティ アートギャラリー 【展覧会担当】 福士・堀 【広報担当】 吉田  
 Tel:03-5353-0756 / Fax:03-5353-0776 / Email:ag-press@toccf.com

## 本展覧会のポイント

◎作品約240点で画家の全貌を紹介する没後最大規模の回顧展。

◎難波田龍起・史男の父子のコレクションとしては国内最大規模の寺田コレクションより史男作品を約100点、そのほか世田谷美術館、東京国立近代美術館、新潟県立近代美術館をはじめとする国内美術館および個人所蔵家の全面的な協力により代表作の多くを網羅。

◎「青春の画家」「夭折の画家」という既存の作家イメージにとらわれずに作品の多様な魅力を浮かび上がらせる展示構成。

◎日記・ノート・スケッチブック・写真などの資料で、画家の生きた時代や制作の背景も紹介。

## [展示構成]

難波田史男の制作を貫く複数の関心とその連関を明らかにするべく、年代順によることなく、モチーフやテーマ、線描と色彩表現の深化など、いくつかの切り口によって史男の画業を複眼的に紹介します。

### 1. 自己とのたたかいの日々 思春期—アドレッセンスのころ

1960年、18歳の史男は画家を志して文化学院に入学しますが、美術学校の授業に馴染まず、自室にこもって独自の制作に向かいます。芸術は「自己とのたたかい」と日記に綴りながら、音楽や文学を糧にして存在の不安や生と死の問題と格闘する日々。そこから生み出された作品は、自己の内面の葛藤を画面にそのままぶつけたかのような直接的な表現が特徴で、まさにアドレッセンス（思春期）の記念碑とあってよいでしょう。没後に両親の龍起夫妻によって「自己とのたたかいの日々」と命名された大判の連作を中心に紹介します。

### 2. 無意識の深みから 初期のドローイング

史男は無数のドローイングを残しています。そこでは、画面を意識的に作ることも、むしろ自分の意思や意図をこえて自然に浮かびあがってくる、捉えがたい想念をすくい取るような作業に夢中になります。そこに現れたイメージは、「無意識」の世界そのものであり、人間という存在のありようを赤裸々に語っているといえるでしょう。



《自己とのたたかいの日々》  
1961年  
水彩、インク、紙  
東京オペラシティアートギャラリー 蔵  
撮影：斉藤新



《タイトル不詳》  
1960年  
水彩、インク、紙  
世田谷美術館 蔵



### 3. コスモスへの旅

ドローイングの制作を通して史男は線描画の才能を開花させますが、それは同時にコズミックな感覚に富んだ一連の作品に結実します。人間や宇宙船、動物、不思議な生き物たちが重力を脱して画面を自由に浮遊するイメージはとてもユーモラスで、人間が本来的にもっている飛翔への夢をさまざまに語るかのようなようです。ときにグラフィックな要素もまじえて一大絵巻を形成した史男の宇宙旅行を体験してみましょう。

### 4. 線と色彩の融合

史男は文化学院を中退後、1965年に早稲田大学第一文学部美術専攻科に入学、その2年後には初個展を開催するなど旺盛な制作を進めます。この時期になるとペンによる線描と水彩による色彩を独自に融合させた小品の制作が重要性を増し、以後それが史男作品の特徴として定着していきます。これまでの様々な試みが重なり合い、史男の絵画が確立する過程が分かります。

### 5. 失われた太陽

1960年代後半には、重要なモチーフのひとつとして太陽が繰り返し描かれます。カミュ、サルトルなどの文学に触発されながら、史男は、自分が幼少時から好んだ暖かい太陽はいまや失われ、それは「不条理」を照らし出す存在でしかなかったと書き記しています。人間は不条理を克服すべきなのか、甘んじるべきなのか、そもそも人間存在とは何か、そんな問いが史男を作品の制作へと駆り立てたのかもしれない。

### 6. 色彩の深まり

1960年代も半ばを過ぎると、史男の制作は色彩表現の深まりに表れるようになります。水彩という技法によるにじみやぼかし、色彩の重なり合いによって透明な光と湿り気のある空気、そしてきめ細かく豊かな絵肌を獲得しつつ、やがて色彩は精神的な深みを帯び始めます。史男は自分を取り巻く世界を、数多くの水彩画に残しました。

### 7. 幾何学と生命の表現

史男が取りくんだ課題のひとつに、幾何学的要素をつかって生命的なものを表現することがあります。史男はしばしば直線、曲線、同心円や幾何学的図形の反復のなかから生命的フォルムが浮かび上がる局面を捉えようとしています。そこでは、以前の宇宙的スケールを描く作品とは対照的に、小さな生き物たちがひっそりと息づくミクロの世界がときに鋭く、ときに愛情のこもったまなざしで描かれています。



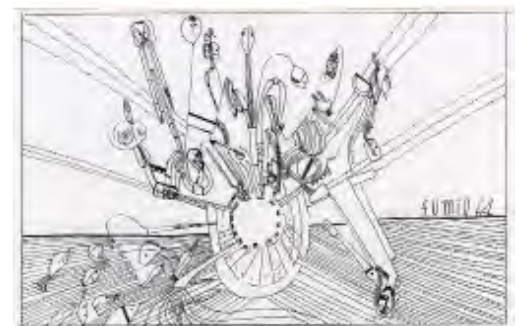
《終着駅は宇宙ステーション》  
1963年 水彩、インク、テンペラ、紙  
個人蔵



《太陽の讃歌》  
1967年 水彩、インク、紙  
アートのスペース遊蔵



《緑の園》  
1967年 水彩、インク、紙  
世田谷美術館蔵



《無題》  
1964年 インク、紙  
東京オペラシティアートギャラリー蔵

## 8. 自己と他者の物語

しばしば孤独の中で思索と制作に励んだ史男ですが、他者や社会に対して無関心だったわけではありません。むしろ孤独の自覚は、つねに他者を意識するところから生まれています。史男はさまざまな群像図を描いてきましたが、後期になると限られた登場人物の中に自己の投影像と他者の投影像が描かれ、両者の関係がはっきりと主題化されるようになっていきます。そこには放浪する旅人や少女、海辺で寄り添って散歩をする男女の姿などが描かれ、終わることのない物語のように想像力をかきたてられます。

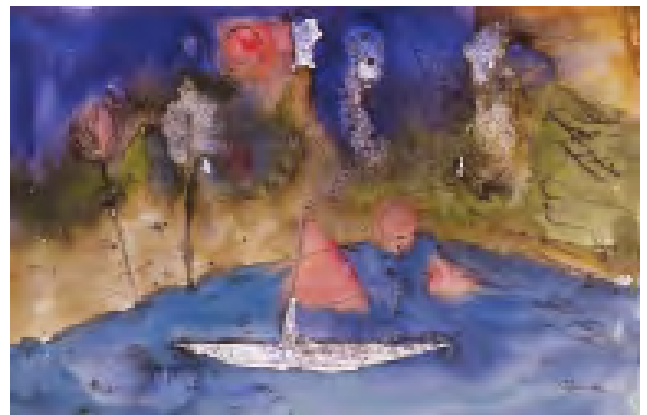
## 9. 生と死の彼方へ

史男は終生、生きることを懸命に考えつづけましたが、それは必然的に死の意識へと史男を駆り立てます。「死」に直面してはじめて見えてくる「生」の真実をつかみ取ること。それこそが史男が求め続けたことにほかなりません。70年頃以降の最後期の作品では、この生と死の問題がもっとも集中的に扱われています。そこで注目されるのは、海や湖といった「水」のモチーフが頻出していることです。激しい葛藤のなかで史男が描いたのは、母なる水への胎内回帰への願望だったのかもしれない。

1974年1月、九州旅行の帰路、瀬戸内海を航行中のフェリーより転落し、史男は32歳でこの世を去ります。人は史男を「夭折の画家」「青春の画家」と言いならわしてきました。しかし、短い制作期間ながら史男の芸術はすでに十分な発展を遂げ、イメージの豊かな広がりと共に完結した世界を確立していたと言えます。本展をとおり、描くことで自己とたたかい、描くことで自分の世界を信じ続けた、史男の制作の日々が鮮やかに浮かび上がってくることでしょう。



《再会》  
1974年  
水彩、インク、紙  
個人蔵



《湖上》  
1973年  
水彩、インク、紙  
東京オペラシティ アートギャラリー 蔵

## [関連イベント]

### ●ギャラリー・トーク

当館のキュレーターが作品を前に難波田史男作品のみどころやエピソードを語ります。

日時:1/14 (土)、1/28 (土)、2/11 (土)、2/25 (土)、3/10 (土) 各14:00 - 15:00

場所:東京オペラシティ アートギャラリー展示室

参加には企画展の当日入場券が必要です。

※予約不要(当日の参加状況により、入場制限を行う場合があります)